町史とっておきの話 304

〝書物の郷〟只見町での書物調査フィールドワーク②

― 中世写本の発見と文化遺産としての保存 ―

早稲田大学非常勤講師
久野 俊彦

修験・龍蔵院聖教典籍の新出

平成元年からはじまった町史編さん事業によって、修験吉祥院・五十嵐義博家や医家・原田拓夫家、石伏集落などからたくさんの書物類が集められました。これらを整理していくうちに、近世の村人は、刊本や写本の書物で読書していたことがわかりました（『只見町史1 通史編』）。また、神奈川大学常民文化研究所による調査では、町内に約四〇〇点もの「職人巻物」が伝存していることが確認されました。これらの学術調査は、只見町における書物研究の基礎となる大きな成果といえます。

町史編さん事業が終了した二〇〇四（平成一六）年の夏、私は職人巻物の補足調査のために、国立歴史民俗博物館の小池淳一氏とともに只見町教育委員会を訪れました。当時、町職員だった新国勇氏と古文書調査員の故横山哲夫氏から、修験・龍蔵院だった山﨑行弘家で古い書物や経本が大量に見つかったが、題名がなく内容もわからないから見てほしいと言われました。その書物は汚れやいたみがひどい端本で、「法印書物」と書かれた木箱は処分された後でした。書物の形のものは取り出されていましたが、経典の端本や断片は、一括して段ボール箱に入れられ「なげる」（捨てる）寸前のところでした。

その書物や断片を広げているうちに、永禄六年（一五六三）という奥書のある陰陽道書や、室町時代の書風の仮名で書かれた『伊勢物語』の古写本が見つかりました。さらに永禄・天正・文禄という戦国時代一六世紀の年号が書かれた仏教書や江戸時代初期の辞書や物語が多数発見されたのです。奥会津の山村に、中世の古写本が存在したことにまず驚きました。重要な資料なので、書誌学的調査と全冊全丁（頁）のデジタルカメラによる撮影を開始しました。書物は長年使われていたため、よれとやつれがひどいものばかりでした。これら一冊一冊のほこりを払い、しわを伸ばしてアイロンがけをして撮影したので、五年間の労力を費やしました。

『神皇正統記 只見本』の再発見

町史編さん事業後は、町教育委員会による文化財調査事業として、吉祥院・五十嵐家の聖教典籍と医家・原田家の書物の詳細な再調査が行われました。原田家の『神皇正統記』は、天正一五年（一五八七）の奥書がありながら、『只見町史』では重要視されていません。しかし、私はこの『神皇正統記』を見て目を見はりました。綴葉装という中世古典籍の装訂で、中世の書風で書かれた文字だったのです。書写した祐俊は、京都の醍醐寺や智積院の高僧に仕えた学僧でした。南北朝時代に書かれた『神皇正統記』が、天正時代に写されて綴じられ、当時のままの美しい古典籍として只見町に残っていたということは、すばらしいことです。

これらの調査成果によって、「修験龍蔵院聖教典籍文書類」が只見町指定文化財に指定され、『神皇正統記 只見本』が福島県指定重要文化財に指定されたのです。

▲発見された瀧泉寺の中世写本

大量の中世写本 瀧泉寺で発見

二〇一七（平成二九）年十一月に瀧泉寺本堂改修のために片付けが行われ、私は重要物の仕分けをしました。本堂須弥壇の後ろにある木箱には近世版本が大量にあり、その奥から新聞紙に包まれた中世写本が出てきました。奥書には『神皇正統記』と同じ書風で「祐俊」とあります。天正・文禄・慶長の年号の祐俊の写本が大量に出現したのです。さらに、本堂を探ると年号が古くなり、応永三十五年（一四二八）の奥書がある書物を最古に、一四〇〇から一五〇〇年代の室町時代・戦国時代の中世写本が約一三〇点、近世の書物が約六〇〇点も発見されました。

この古典籍の量と質には驚嘆します。まさにこれらの文化遺産は、祐俊による筆写の功績に加えて、代々の住職や檀家、そして雪という只見の風土が、守り継いできたものでしょう。これまでの一連の発見は、村落の書物が中世から持続的に存在していたことを示す研究のフロンティアといえます。